

琉球大学学術リポジトリ

東南中国の紡錘車覚書

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): 東南中国, 先史文化, 曇石山文化, 紡錘車 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33126

東南中国の紡錘車覚書

後藤雅彦

Masahiko Goto

A Study of Notes on Spindle Whorls in Southeast China

東南中国において、新石器時代後期以降、紡錘車が普遍的に出土するようになる。しかし、これらの遺物は紡錘車としての事実報告がなされていても、それ以上、その時間的な変遷や分布について、あまり研究の俎上にあがることがなかったのが現状である。しかし、各遺跡に共通する要素として、また時間的にも継続する要素として重要な考古資料であると考えられる。

そこで本稿では、紡錘車の集成的研究の前提として、出土状況の明らかな閩江下流域の紡錘車をとりあげ、紡錘車研究にあたっての問題点を整理する。同地域では、新石器時代後期に紡錘車は普遍的な遺物となり、新石器時代後期から殷代併行期にかけて、土器破片利用品が減少、定形的な断面台形紡錘車が出現し、器形の定形化の一方で紋様を施し、個体の識別が強化されるという時間的な変遷を辿る。

キーワード：東南中国、先史文化、曇石山文化、紡錘車

はじめに

東南中国において、新石器時代後期になると各地域文化に一般的に紡錘車（紡輪）が伴うようになる。東南中国の先史文化は周辺地域、とくに長江中・下流域において展開した先史文化に影響されながらも、独自の展開を示すと

考えられる。筆者は、こうした先史東南中国の各地域文化の地域的特徴と、周辺地域との関わりを検討してきた。その一環として、拙稿（2002）にて貝塚遺跡を共通項にして、各地域文化を構成する遺跡にたちかえり、比較検討を行った。これらの貝塚遺跡に共通する考古資料として、東南中国を特徴づける有段、有肩の片刃石斧とともに紡錘車が普遍的に出土する。各報告書の中でも、とくに断面形態にもとづき分類がなされているが、全般的に関心の低さは否定できず、その時間的変遷や分布について、あまり明らかになされていないように思える。

また、紡錘車自体、単純な器形であるが、細かくみれば細分は可能であり、遺跡ごとの差、地域的な差も強く認められるのである。しかしながら、一地域内において、遺跡差を越えた時間的な変遷を捉えることができるのならば、東南中国の先史文化の展開をあとづけるには格好な資料になると考えられる。

紡錘車に関わる研究は、日本考古学において、八幡一郎氏を代表として広範囲に亘って比較研究がなされると同時に、日本稲作文化の系譜や展開を示す上でも注目されてきた問題である。八幡氏（1931）は弥生時代に紡錘車が多く伴うことから、「紡績の技術が相当に進んだのは、古式弥生式土器の時代ではないかと予想され、同時に機織の普及も、その時代に強かったのではないか」と考え、「金属器の発現、原始的農耕の起りとともに、機織の発達生活様式の変遷を示す一証左となるであろう。」とし、「布目ある弥生式土器の性質、および正しき紡錘車の伴存遺物に関する報告が、各地から寄せられんことを祈る」と論じた。

また、実際に朝鮮半島の紡錘車の集成的研究を進める中（八幡1968）、「資料を整備すれば、各時代の型式の消長、各地域の型式の出入などが、かなり具体的に考察することができ、それによって隣接の中国東北部や西日本の紡錘車との連繫を通じて、紡織技術流伝の問題や、その背景をなす各時代の文化交流の問題の解明に資し得るであろう」と紡錘車研究の方向性を導いたと言えよう。

その後、中間研志氏（1985）は縄文時代後期以降、弥生時代前期までの紡錘車の変遷過程を明らかにし、4つの画期をみいだし、さらに各画期にあたって、外来的要素の有無の可能性から、系統論についても言及している。その中で、朝鮮半島から中国まで紡錘車の比較検討を行っている。

東南中国の各地域文化の形成に関わる問題として、長江流域に展開した先史文化を稲作文化の展開として言い換えることができるのならば、まさに東南中国は稲作文化の南への広がりとして位置付けることができ、紡錘車の問題もその延長線上にあると考える。

そこで、本稿では閩江下流域の曇石山文化を中心に東南中国における紡錘車をとりあげ、若干の検討を加えたい。繰り返しになるが、これまであまり研究の俎上にあがらなかった紡錘車をとりあげ、今後の研究のあり方を探ることにする。

なお、東南中国の時期区分として、拙稿（2002）において、広範囲に広がる東南中国の先史文化の動向を大まかに整理するために、時間軸をⅠ期（紀元前5000年以前）、Ⅱ期（紀元前4000年紀以降）、Ⅲ期（紀元前3000年紀以降）、Ⅳ期（紀元前2000年紀以降、殷代併行期）と設定した。本稿でもこれを便宜的に採用するが、紡錘車自体の出現期は古くてもⅡ期以降である。新石器時代後期の曇石山文化はⅢ期、曇石山上層文化はⅣ期前半に相当する。

1. 紡錘車研究における問題の所在

中国を対象地域とした紡錘車研究は、前述したように日本の紡織技術の源流を稲作農耕の関わりと合わせて追求することを目的にし、八幡氏や中間氏によって黄河以北、とくに東北地域を中心に行われている。また、西川宏氏（1985）は東アジアにおける織物と農業生産の密接な関係を明らかにする中、中国東北から華中、華北の紡錘車についても言及している。

一方、中国考古学における紡錘車研究について、研究史を網羅しているわ

けではないが、以下のような研究成果を紹介しておきたい。

まず、佟柱臣氏（1989）は黄河中下流域における新石器時代工具について論述し、石斧類、石刀類、石鏃など各種遺物を整理する中、紡錘車をとりあげ、主に断面形態をもとに3つの大分類と8式の細別分類を設け、石製、土製という材質との関わりや時間的変遷を明らかにしている。

長江流域については、中流域の江漢地区における紡錘車に関する研究が劉徳銀氏（1991）によって行われている。劉氏によれば、大溪文化期は大型、厚く、重量も重いが数量は少なく、屈家嶺文化期、石家河文化前期になると紡錘車の型式が多様化し、数量も増え、製作は精緻、直径は小さくなり、扁平になる。そして彩紋を施すものが多数を占める。石家河文化中期になると、さらに小さく、扁平になるが、作りはやや粗雑になり、彩紋が消失し、後期になると、型式、数量ともに減少するばかりか、大多数が不規則形になり、紋様も消え、みがきもなくなり、厚さの不均一な楕円形になる。以上のように、帰属年代が明らかな紡錘車資料に関して、形態の変化、紋様の変化という過程を明らかにしている。これを踏まえて張緒球氏（1992）も形態変化の背景として対象となる繊維の変化を指摘し、紋様のもつ意味についても考察を加えている。

このように従来の研究の成果において、地域を絞り、各地域文化の変遷の中で紡錘車の変化が明らかにされ、工具としての形態変化の様相から紡錘の対象となる繊維の変化を含めた紡織技術の変化まで、その検討の枠は広がる。八幡一郎氏（1969）が指摘するように、「使用目的が限定され、かつそれに応ずべき機能を具える紡錘車が、用材や細部の形、装飾の有無などだけで、ただちに時代型または地方型を定めることはできない」からこそ、一地域の中で、層序関係や土器群の変遷を根拠とする時間的な前後関係の明らかな出土紡錘車をとりあげることが、研究の前提になるのであろう。

次に、紡錘車自体に関する検討項目を設定してみたい¹⁾。

まず、材質によって区分することができる。東南中国では、土製品が一般

的であり、一部石製品を含み、貝製品の報告も1点ではあるが報告されている²⁾。また、工具として存在するあり方、作り方によって、工具としてもとから製作されたものと、土器破片の再利用（土器破片利用品）がみられる。

形態分類については、紡錘車は単純な形態ではあるものの、断面形態などによって細分が可能である。しかしながら、本稿では、典型的な断面形態を抽出して分類を予め設定するのではなく、各遺跡単位での分類を整理し、層序関係にもとづく時間的変遷、出土状況を確認することによって、如何なる要素が紡錘車の分類にあたって有効であるかを検討する。なぜなら、紡錘車の細分を試みるにしても、その変化を捉えるには数量的な変化も重要であると考えられるが、東南中国の遺跡報告文では、各々の基準による分類後、その点数を記されているものの、代表例を1, 2点図化しているにすぎず、全出土資料を予め設定した分類に再編成することができないからである。

また、前述したように紡錘車の分類にあたって、大きさ、重量が問題となる。竹内晶子氏（1989）は、紡輪の重さがその紡輪の用いた繊維材料と密接に関連することから、出土報告における記載事項として、厚さや直径とともに重量を記すことの必要性を指摘する。ただし、東南中国においては大きさについては図化資料から抽出するしか方法がなく、また重量の記載がないことから数値的な変化の把握は期待できないのが現状である。

次に、紋様の有無と紋様の種類である。紋様をもつ紡錘車について、竹内晶子氏が「糸をつくるたいせつな道具に文様をつけて他人の持物と区別したのであろうか。」とするように、その意味付けについては、製作者、使用者側からの何らかの要因によって個体の識別が意図されたと考えられる。本稿では、その意味について深く検討することはできなかつたが、紋様をもつ紡錘車の時間的、空間的ひろがり捉えることに主眼を置くことにした。

2. 閩江下流域の紡錘車

ここでは、新石器時代後期の曇石山文化が展開した閩江下流域の諸遺跡出土の紡錘車について検討する。とくに曇石山遺跡、荘辺山遺跡、溪頭遺跡は、各々下層がⅢ期の曇石山文化、上層がⅣ期の曇石山上層文化に帰属するという層序関係を捉えることができ、両層ともに紡錘車が伴う。また曇石山文化においては墓葬が数多く調査され、墓の副葬品として紡錘車が出土しており、遺構単位で紡錘車を検討することができるという利点がある。

(1) 曇石山遺跡 (福建省博物館 1976・1983) (第1図)

6次調査によって、下層から上層にかけて土製紡錘車が出土している。

下層は11点出土し、3式に分類されている。Ⅰ式(1・2)は3点、断面が菱形を呈する。1には爪形の刺突紋が施されている。Ⅱ式(3)は4点、扁平で側面下部で膨らみ、周囲に稜線が一周はしる。Ⅲ式は4点、土器破片利用品である。2点は穿孔がみられ、2点は未穿孔の円形の土器片である。

中層は40点、4式に分類されている。Ⅰ式(4・5)は3点、断面台形(梯形)、Ⅱ式(6)は25点、側面中央やや下部において膨らみ、稜角をもつ。周囲に刺突紋が一周走る。Ⅲ式(7)は1点、扁平、断面が長方形を呈する。Ⅳ式は11点、土器破片利用品で、穿孔されたものと未穿孔が含まれる。

7次調査においても、中層から9点の紡錘車が出土しており、Ⅱ式相当(8~12)、Ⅰ式相当(13~16)に分けられる。

上層は64点(内、完形品が48点)、3式に分類されている。Ⅰ式(17~22)は50点、断面台形を呈し、有紋には放射状の刻紋や彩絵が施されている。Ⅱ式(23・24)は11点、扁平で周囲に突起を有する。断面は六角形、中層のⅡ式に近いが側面の稜角はいくらか下方にある。有紋もみられ、23には十字状の紋様が施されている。Ⅲ式(25・26)は3点、周囲が窪み、側面は緩やかなカーブをなす。この他に直径3.8cmの円形土器片があり、紡錘車に再利用するために縄紋陶片の周縁をみがいたようである。

第1図 疊石山遺跡の出土紡錘車（縮尺： $\frac{1}{2}$ ）
（出典：福建省博物館 1976・1983）

(2) 荘辺山遺跡（福建省博物館 1998）（第2図）

同遺跡は1960年代の調査以降、1980年代に大規模な発掘調査が実施され、最近報告が刊行された。紡錘車も多数出土しており、下層は曇石山文化期、上層は曇石山上層期に相当する。拙稿（2002）でも指摘したように、曇石山遺跡においては上層が攪乱を受けており、層序としては安定していないが、荘辺山遺跡は遺構も伴う。

下層は41点、7式に細分されている。Ⅰ式（1）は1点、断面が隅丸長方形を呈する。Ⅱ式（2）は4点、側面中央において膨らみ、稜角をもつ。所謂算盤珠形である。Ⅲ式（3・4）は15点、曇石山中層Ⅱ式に相当する側面下部に膨らみ、稜角をもつ。篋点紋をもつものが含まれる。Ⅳ式（5・6）は11点、断面台形であり、底部直上に段をもつ。やはり篋点紋をもつものが含まれる。Ⅴ式（7・8）は6点、断面台形である。Ⅵ式（9）は1点、断面が三角形を呈する。Ⅶ式（10）は3点、土器破片利用品である。

墓葬を含めた下層文化遺存は伴出土器や重複関係より3期に区分されるが、これに対応させると1期における副葬例はなく、2期にⅡ式・Ⅲ式・Ⅳ式・Ⅶ式、3期にⅡ式・Ⅲ式・Ⅳ式・Ⅴ式を帰属させることができる。Ⅴ式の断面台形タイプは時間的に後出であることを示している。

上層は137点、7式に細分されている。Ⅰ式（11）は2点、断面八角形、篋点紋が施されている。Ⅱ式（12）は4点、下層Ⅱ式に相当し、篋点紋もみられる。Ⅲ式（13）は10点、下層Ⅲ式に相当する。Ⅳ式（14・15）は9点、下層Ⅳ式にほぼ相当する。Ⅴ式（16～18）は105点で、細別分類の中で最も数量が多い。断面は台形を呈し、円圈紋、放射状篋点紋、彩絵もみられる。図化資料をみると、厚さが0.6～2.7cmと幅があり、扁平タイプと厚手タイプに区分ができそうであるが、各資料の数値が不明である。ただし、記載では扁平がほとんどのようである。Ⅵ式は6点、図版記載がなく詳細は不明であるが、頂部は弧をなし、断面は三角形に近いとされる。Ⅶ式（19）は土器破片利用品で1点のみである。

第2図 荏辺山遺跡の出土紡錘車（縮尺： $\frac{1}{2}$ ）
（出典：福建省博物館 1998）

(3) 溪頭遺跡（福建省博物館 1984 a）（第3図）

下層包含層から断面台形の土製紡錘車1点(1)が出土している。遺構出土は、前期土坑から2点(2・3)であり、2は断面がほぼ台形で、側面下部に稜角をもち、上面が僅かにくぼむ。3は算盤珠形で、周辺に篋点紋が一周巡る。底面には篋点を方格状にまわし、内側に対角線状の沈線がはしる。また、穿孔土器片1点は土器破片利用の紡錘車と思われる。前期墓葬からは上層I式と類似する紡錘車が2点出土している他、後期墓葬からは13点をみる。3式に細分されている。I式(4・5)は7点、前期墓出土品と類似し、篋点紋が2重3重に巡るものもある。II式(6・7)は5点、扁平で断面台形、周囲に1重2重の篋点紋が施されるものが多い。III式(8)は1点、円餅状とされ、断面は台形に近い。一面に短い篋点紋が円周を6分する位置に各々配置されている。

上層から15点、6式に細分されている。I式(9)は3点、側面下部に膨らみ、稜角をもち、上面周囲が盛り上がる。篋点紋が2周巡る。II式(10)は4点、断面台形。III式(11)は1点、頂部が丸みを帯びた断面三角形を呈する。IV式(12)は2点、算盤珠形であるが、明瞭な稜角をもたない。V式(13)は1点、断面はI式に近いが厚手であり、篋点紋が2周巡る。VI式(14)は4点、断面菱形を呈し、らせん状の紋様が巡る。

(4) 東張遺跡（福建省文物管理委員会 1965）

同遺跡は3層に区分されている。下層はIII期、中層・上層がIV期に対応し、中層は曇石山上層に併行する。紡錘車は石製2点、土製334点出土している。とくに5×5mのグリッドを14ヶ所含む乙区では下層74点、中層124点、上層28点、計226点にのぼる紡錘車が出土している。石製は下層から2点出土、その内、図化資料は断面長方形を呈する。土製品については、代表的な紋様及び断面形を抽出し、図化しているにすぎず、数量的な検討を加えることができなかった。ただし、断面形態をみる限り、上述した諸遺跡出土品に共通

第3図 溪頭遺跡の出土紡錘車（縮尺： $\frac{1}{2}$ ）
（出典：福建省博物館 1984a）

第4図 殼坵頭遺跡の出土紡錘車（縮尺： $\frac{1}{2}$ ）
（出典：福建省博物館 1991）

するものが多い。

なお、円盤状土器片が22点出土している。中央に穿孔も有することが報告されていることから、土器破片利用品と考えられる。乙区からは15点出土しているが、層序毎の数量をみると、下層10点、中層5点で年代が新しくなるほど減少し、上層における出土例はないようである。

(5) 穀垣頭遺跡（福建省博物館 1991）（第4図）

同遺跡は曇石山文化に先行する新石器時代中期に帰属する。土製紡錘車が8点、3式に分類されている。Ⅰ式（1・2）は3点、円餅状とされ、断面が扁平な台形、上下両面に放射状刺突紋がはしる。側面部に波状の線刻紋が施されている。Ⅱ式（3・4）は2点、断面六角形、側面下部に膨らむもので、稜角の有無の差がある。上下の両面、側面に爪形（半月状）の刺突紋が施されている。Ⅲ式（5・6）は3点、断面長方形である。

(6) 黄土崙遺跡（福建省博物館 1984b）

同遺跡は曇石山上層文化に後続する時期（Ⅳ期）である。墓葬が19基確認されているが、その内11号墓より土製紡錘車2点が出土している。副葬されている陶罐の中から杯6点とともに確認されている。写真図版のみで詳細は不明であるが、円餅形とされ、厚さ0.6cmという記載から扁平タイプと思われる。数量が少ないが、曇石山上層期にみられる紡錘車が継続していることを示す。

3. 閩江下流域における紡錘車の変遷

まず、曇石山遺跡における紡錘車の特徴を以下のように整理してみたい。形態、とくに断面形をみると、下層のみに菱形がみられ、その後、台形が増加し、中層では40点中2点、上層では64点中50点を占めるようになる。下層、

中層では土器片利用が一定量を占めるが、上層になると1点の推定品がみられるにすぎない。土器破片利用品が減少すると同時に、断面形態が台形に定形化する変化は、工具としての紡錘車の変遷を辿る上で興味深い現象である。紋様をもつ紡錘車については、中層以前の篋点紋（刺突紋）から、上層においては同時期の彩陶のモチーフにも通じる彩絵が施されるようになる。とくに定形化した断面台形に彩絵が施された事例が多いことは注意される。

次に各遺跡と曇石山遺跡の紡錘車を比較としてみると、荘辺山遺跡においても台形（V式）紡錘車は下層で41点中6点であるのに対し、上層になると137点中105点と大多数を占めるようになる。ここでも、IV期において紡錘車の定形化をうかがうことができる。また、荘辺山遺跡では、土器破片利用品は下層、上層ともに数量的には少ないが、上層で減少する傾向を示す。

また、曇石山遺跡上層では彩絵が施された紡錘車の数量の記載はないが、図化資料だけでも計64点中7点あり、それに比べると荘辺山上層は計137点中、僅かに2点である。一方、溪頭遺跡上層では、出土数量自体少ないものの、彩絵が施された例はなく、出土土器においても、曇石山遺跡のような彩陶がみられない。拙稿（1991）にて曇石山文化から上層への移行期に、Ⅲ期から連続的に移行する中で彩陶をもつ曇石山遺跡、東張遺跡と、次のIV期後半へ連続的に移行する溪頭遺跡の2つのパターンを指摘した。これは、まさに殷代併行期という時代の転換期における各遺跡の態様の差として理解することができ、紡錘車の装飾にも同様な傾向を読みとることができる。

ところで、同地域の紡錘車の系譜について、初源形態から検討しなくてはならない。新石器時代中期に属する殼丘頭遺跡の事例をみると、断面形態の差として、扁平な台形、六角形、長方形の3種が混在した状況にあり、現時点では初源形態を確定できず、その系譜については判断を下すことは難しい。その後、同遺跡にみる断面形態は、各々、曇石山文化へと踏襲されるが、Ⅲ期からIV期にかけて断面菱形から扁平化、断面台形の定形化という一つの画期を迎えることになる。

4. 東南中国の紡錘車研究の課題

以上、閩江下流域における各遺跡出土の紡錘車の様相と時間的変遷を明らかにした。ここでは、紡錘車研究を東南中国先史研究の中でさらに深化させるために以下の点について整理し、今後の課題としてみたい。

(1) 東南中国各地の紡錘車との比較研究

ここでは、閩江下流域と東南中国各地の紡錘車を比較してみたい。但し、閩江下流域と共通した紡錘車の形態、或いは異形の紡錘車の分布を東南中国において追求するのではなく、一遺跡の中で出土状況が明らかで、数量的な把握が可能である遺跡を、その比較対象として選び出す方法をとる。

東南中国の先史文化の中で、閩江下流域との比較検討を行う上で珠江三角州はとくに注目される。やはり、新石器時代後期において貝塚遺跡を中心に紡錘車が一般的に出土し、事実報告として、これらの記載は各報告文にみることができる。しかしながら、数量的な報告や細かな記載がないのが現状である。その中で、管見によれば南海県鮫魚崗遺跡は数量的な把握が可能な例としてとりあげることができる。

鮫魚崗遺跡（広東省文物考古研究所他2001）では、包含層出土の紡錘車は60点、2式に分類されている。Ⅰ式は33点、厚さ1cm以下の扁平、断面台形、上面は平らか、僅かに窪む。底面に十字状の刻線がはしるものが多い（第5図1～5）。Ⅱ式は27点、厚さ1cm以上で、やや厚いが、形態的には断面台形でⅠ式に類似する。底面の十字状刻線は少数で、無紋が多い（同図6～10）。

出土状況の詳細は明らかでないが、図化資料をみる限り、Ⅰ式は5点すべて3層出土、Ⅱ式5点全て2a・b層であり、この点を踏まえると、層序的にもⅠ式からⅡ式へ時間的変遷を辿ることになり、断面台形にはかわらないが、肥厚化、無紋化の変化を示すことになる。

また、墓葬は36基の内、6基に各1点の紡錘車を副葬する。記載では比較

第 5 図 珠江三角州諸遺跡の出土紡錘車 (縮尺： $\frac{1}{2}$)
(出典：引用文献に記載した各遺跡の報告)

的厚く、断面台形のⅡ式に属すると考える。その中で7号・16号墓は共伴土器を有する。同遺跡の報告文の中で、時期区分として2期に細分されているが、同墓出土土器は、2層出土遺物と合わせて2期後半に位置付けられていることから、やはりⅠ式よりも後出である可能性が高いと思われる。

同形態の紡錘車の分布として、銀洲遺跡（広東省文物考古研究所他2000b）からも魷魚崗遺跡にみるⅠ式（同図11・12）・Ⅱ式（同図13・14）の両者がみられ、十字状の紋様なども類似する。ただし、包含層（3層）出土で、Ⅰ式・Ⅱ式の時間差は明確でなく、数量的な報告もないようである。また、両遺跡とほぼ同時期の圓洲遺跡（広東省文物考古研究所他2000a）においてもⅠ式紡錘車がみられ、紋様も類似する（同図15）。

以上、3遺跡は珠江三角州におけるⅢ期からⅣ期の移行期を代表とし、出土土器群も共通しており、紡錘車についても定形化した断面台形を共有する点は注目され、閩江下流域における紡錘車の形態変遷の画期と一致すると考えられる。

ここで閩江下流域と比較してみたい。まず、断面台形の出現は、閩江下流域においても初源的なものでなく、珠江三角州において先行する型式の存在が予想されるが、管見に限るが類例はみあたらない。同地域では新石器時代中期に帰属する咸頭嶺遺跡より、石製紡錘車4点の報告があるが（深圳博物館他1990）、未製品であり、未穿孔も含まれ、大きさも2.5cm以下であることも考えると、紡錘車と認定できるか心許ない資料である。

一方、断面台形について、魷魚崗遺跡の例では扁平から厚手への変化が辿れることは、その変化の方向が閩江下流域でも一致するか否かはともかく、厚さによる分類の必要性があろう。実際、莊辺山遺跡上層では台形紡錘車の出土数は105点にのぼり、図化資料を確認しただけでも、厚さを示す数値に幅があることは前述した通りである。

また、疊石山上層文化において、定形化した断面台形の出現とともに、それらに装飾として彩絵が施されるのと同様に、珠江三角州の断面台形紡錘車

に施された十字状などの紋様は注意される。器形的に定形化し、個性がなくなると同時に、一方で装飾を付して個体の認識を強めていると考えられるのではないだろうか。この点、閩江下流域と珠江三角州における新石器時代後期から後続時代への移行期の特徴として考えたい³⁾。

ところで茅崗遺跡（広東省博物館1983）は、上述3遺跡よりもやや時間的に遅れるが、土製紡錘車が17点出土している。残念ながら詳細は不明であるが、その内1点の穿孔部には木質の紡莖が一部残存しているのは、紡錘車の使用方法を復元する上で重要である（同図16）。また、紡錘墜（錘）3点と報告されているものがある。さらに「陶円形餅塊」と報告された土製品が32点出土している。報告者は用途不明としているが、曇石山文化にみられるような土器破片を円形に加工し、紡錘車を製作する途中のものかもしれない。珠江三角州では、管見によれば土器破片利用品の出土例の報告がないが、今後検討の余地があるように思える。

また、茅崗遺跡とほぼ同時期に属する村頭遺跡（広東省文物考古研究所他2000c）においても紡錘車が出土している（第5図17～20）。残念ながら数量的な報告ではないが、茅崗遺跡に類似する断面長方形（同図17）の他に、円台形とされる断面形態がみられる（同図19）。円板一面の中央が突出するもので、所謂笠形に近いものである。同形態の紡錘車は同じく珠江三角州に位置する竜崗遺跡（広東省博物館1984）でも確認できる。

さらに、閩江下流域における溪頭遺跡上層にみられるⅢ式（頂部が丸みを帯びた断面三角形）、図化資料はないが莊辺山遺跡上層のⅥ式も形態的に類似するものであり、断面台形以外にⅣ期の特徴的な形態として抽出できるのかもしれない。しかし、竜崗遺跡も数量的な報告はなく、溪頭遺跡のⅢ式は僅か1点、莊辺山遺跡のⅥ式も6点という出土量であり、本稿で行った分析方法に準じるものではないことから、ここでは、今後注意したい形態としてとりあげるに留めたい。

(2) 墓葬出土の紡錘車

本稿での紡錘車研究の方法として、層序関係、遺構出土品など数量的に把握が可能な遺跡ごとに紡錘車をとりあげた。前述したように閩江下流域、珠江三角洲の両地域では埋葬遺構を伴う貝塚遺跡が多く、それらの墓葬から副葬品として紡錘車が出土している。必然的に、墓葬副葬品としての意味付けが問題となってくる。なぜなら、紡錘車は民族例を参考にしても女性を象徴する工具として考えられており、副葬品である紡錘車の存在は女性墓との関わりが各地で指摘されている。その点を踏まえて、上述した東南中国の墓葬副葬品としての紡錘車を整理してみたい。

疊石山遺跡では墓葬副葬品としては、下層の11号墓、32号墓で紡錘車が出土している。両者ともに女性墓と推定されている。中層では3基の墓葬から出土している。4号墓、5号墓は女性墓であるが、9号墓は男性墓である。

しかし、疊石山下層では、工具類の副葬は紡錘車に限られており、中層でも工具は紡錘車以外に片刃石斧（4号墓）と石鑿（24号墓）のみしか副葬されず、両者ともに女性墓であり、4号墓には紡錘車も伴う。

荘辺山遺跡では下層において63基の墓葬が確認されている。その内、18基の墓葬から紡錘車が出土し、性別の鑑定によると女性3基、男性8基、性別不明7基となる。副葬された工具としては他に石鏃、片刃石斧などあるが、石鏃を副葬する34号墓は男性墓とされるが、紡錘車も伴う。

溪頭遺跡では墓葬6基に副葬されている。44号墓においてⅠ式3点、Ⅱ式5点と多くの紡錘車が副葬された他、各1点出土している。この内、女性墓は25号、51号のみ、男性墓は15号、28号、性別不明は11号、44号墓である。

このように閩江下流域における疊石山文化では男性墓にも紡錘車が副葬される事例が比較的多くみうけられても、基本的に副葬品の数量は少なく、土器類がほとんどであり、工具自体の副葬例が極めて限られていることから、副葬品によって男女の性差を示すことはないのかもしれない。

次に、比較として珠江三角洲を例にしてみよう。魷魚崗遺跡の副葬紡錘車

の出土状況は、男性墓が4基、性別不明2基となり、ここでも紡錘車が女性に限って副葬されるということはないが、女性墓と鑑定された墓葬3基の内、39号墓に土器（豆）が1点副葬されている他、副葬品はない。

ただし、河宕遺跡では、墓葬副葬品として、男性に石斧、片刃石斧、石鏃が伴うのに対し、女性に紡錘車が伴うことが報告されているが、出土状況は明らかでない⁴⁾。

ところで、筆者は東南中国の先史文化について、本稿でとりあげた閩江下流域と珠江三角州を沿海側、そして閩江上流域や北江流域の石峽文化を内陸側として、両者の比較検討を進めている（拙稿1996）。紡錘車もこの点を踏まえて、若干の検討を加えたい。ただし、内陸側を代表する石峽遺跡では、墓葬副葬品として合計93点の土製紡錘車が出土し、また石製生産工具も多数、副葬され、これらの組合せなども注目されるが、個別の墓葬出土状況について、報告が概報（石峽発掘小組1978）に限られていることから、現時点では詳細な検討を行うことは難しい。

そこで、最近、報告された浙江省好川遺跡の墓葬出土遺物についてみていくことにする（浙江省文物考古研究所他2001）。同遺跡は浙江省西南部に所在し、福建、江西省に隣接する、東南中国内陸側に近い位置にある。墓葬が80基確認されているが、人骨が未検出である為、性別については不明である。しかしながら、工具類の副葬品の組合せには顕著な差違をみいだすことができる。

土製紡錘車は17点の内、14点が復原可能であり、11基の墓葬から出土している。形態的な特徴は断面台形に含まれ、両面が平坦であるものと、一面が弧状になるものがある。副葬品としての組合せを考えるにあたって、石製工具類の副葬状況を概観してみると、石器は80基の墓葬の内36基に合計144点が副葬されている。器種的には、有孔石斧11点、片刃石斧34点、石鏃95点のものぼる。紡錘車との共伴関係では66号墓で片刃石斧2点と伴出する他、有孔石斧や石鏃に伴う事例はなく、おそらく副葬工具類に差異が存在し、それ

が男女の性差を示すのかもしれない。

このような状況を鑑みると紡錘車の副葬は、他の工具類の副葬される中、男女の性差が顕在化するようであり、閩江下流域及び珠江三角州の新石器時代後期の墓葬副葬品には工具類の副葬が少ないことから、こうした選択が働かなかつたといえることができる。

まとめ

従来、事実報告がなされていても、それ以上、その時間的な変遷や分布について、あまり研究の俎上にあがることがなかつた東南中国の紡錘車に関して、各遺跡に共通する要素として、また時間的にも継続する要素として重要な意義をもつと考えた。とくに出土状況が明らかなで、数量的なデータが抽出できる閩江下流域をとりあげることによって、紡錘車の分類を検討し、時間的な変化を示す要素に着目した。同地域では新石器時代時代後期以降、Ⅲ期からⅣ期の移行期において、紡錘車の作り方として、土器破片利用品が減少する中、器形的には定形的な断面台形の紡錘車の出現し、その一方で紋様を施し、個体識別が強化されるという大きな流れを時間的な変遷の中でとらえることができた。

そして、比較検討として珠江三角州をとりあげ、やはりⅢ期からⅣ期の移行期において紡錘車の定形化がうかがえることは、東南中国に共通した紡錘車形態の変遷における一つの画期として位置付けることができるのかもしれない。

ところで、両地域共に初源形態については、さらに遡るであろうと推定できるものの、本稿ではその系譜について、長江中・下流域との具体的な比較検討を行うことができず、これについては今後の課題としたい。

いずれにしても東南中国における紡錘車の出現とその系譜は、東南中国の先史文化（とくに新石器後期文化）の系譜、成立と密接な関係があり、やは

り、紡錘車だけの問題ではないことは言うまでもない。今後、東南中国における稲作文化の展開を論じる上でも、こうした紡錘車の歴史的意味も問い直す必要がある。

また、最近の東南中国の先史文化研究において、新石器時代中期（Ⅱ期）を中心として、東南中国に共通する要素として、石製樹皮叩き具の存在が指摘されており⁵⁾、この石製樹皮叩き具は、中国沿海地域と海峡を挟んだ台湾との関係からさらに太平洋地域へと視野が広がっている。一方、東南中国の紡錘車は、具体的な系譜は明らかでないが、中国大陸内における地域間交流を示すものとして注目され、紡錘車を用いた植物繊維の加工の出現及び展開が東南中国の先史文化の形成に一つの目安になると考えられる。

その為には、やはり各地域、各遺跡出土の紡錘車を丹念に拾いだすことが求められる。

註

- 1) 佐原真氏（1964）による弥生時代の紡錘車に関する分析視点を参考にす。まず、材質について大別し、土製品、石製品は、本来の製品（A種）と土器片やその他の石器の再加工したもの（B種）に区別し、さらに形態の特徴を検討する。そして、弥生時代の紡錘車を概観し、作りと重量について、時代差、地域差が認められることを指摘している。
- 2) 珠江三角州に位置する河宕遺跡で紡錘車が126点出土しており、その内1点が貝製品とされ、残り125点は全て土製品であると報告されている（楊、陳1981）。
- 3) 河宕遺跡の報告文では、土製紡錘車を6式に区分し、層序関係からも、その変化が指摘されているが、図化資料の掲載がなく詳細は不明である。ただし、2層（上層）の特徴として、V式の断面台形とVI式の乳凸形をあげている。前者には十字状の線刻も施されていることから魷魚崗遺跡などの紡錘車と類似すると考えられる。

- 4) 河宕遺跡の墓葬について、梶山勝氏(1992)は副葬品だけでなく、埋葬人骨の頭位方向も合わせて、男女の性差について言及している。本稿では、副葬された紡錘車に焦点をあてた為、墓葬の情報を十分に活用できなかった。今後、墓葬研究が進展している長江中・下流域における墓地遺跡の検討も参考にしながら、墓葬出土資料の比較検討を総合的に行う必要がある。
- 5) この石製樹皮叩き具については、鄧聰氏によって詳細な検討が進められている。その中で、鄧氏(2001)は石製樹皮叩き具(石拍)と紡錘車の出現期について言及している。本稿でもとりあげた珠江三角洲では本稿Ⅱ期の大湾文化には紡錘車が伴わず、Ⅲ期以降、石峡文化などで紡錘車が出現する。しかし、雲南省やベトナムにおける石拍と紡錘車の共伴関係から、両者が時間軸において排他的な関係でないことを指摘している点は重要である。

引用文献

- 梶山勝1992「中国嶺南地方の墓制—新石器時代晩期を中心として—」『古代文化』43-11, 13~25
- 広東省博物館1983「広東高要県茅崗水上木溝建築遺址」『文物』1983-12, 31~46
- 広東省博物館1984「広東南海県竈崗貝丘遺址発掘簡報」『考古』1984-3, (203~212)
- 広東省文物考古研究所他2000 a「広東東莞市圓洲貝丘的発掘」『考古』2000-6, 11~23
- 広東省文物考古研究所他2000 b「広東三水市銀洲貝丘遺址発掘簡報」『考古』2000-6, 24~36
- 広東省文物考古研究所他2000 c「東莞村頭第二次発掘簡報」『文物』2000-9, 25~34
- 広東省文物考古研究所他2001「南海市鮑魚崗貝丘遺址発掘報告」『広東省文物考古研究所建所十周年文集』282~340
- 後藤雅彦1991「中国東南部の先史文化—福建・曇石山文化を中心に—」『史学研究集

録』第16号, 7~34

後藤雅彦1996「良渚文化と東南中国の新石器文化」『日中文化研究』第11号, 171~179

後藤雅彦2002「東南中国の貝塚遺跡」『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』
第10号, 149~180

佐原真1964「第2節 土製品」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会, 97~104

深圳博物館他1990「深圳市大鵬咸頭嶺沙丘遺址発掘簡報」『文物』1990-11, 1~11

石峡発掘小組1978「広東曲江石峡墓葬発掘簡報」『文物』1978-7, 1~15

浙江省文物考古研究所他2001『好川墓地』文物出版社

竹内晶子1989『弥生の布を織る』UP考古学選書9 東京大学出版会

張緒球1992『長江中游新石器時代文化概論』湖北科学技術出版社

鄧聰2001「東亞樹皮布文化考察」『博望』第2号, 15~26

佟柱臣1989「黄河中下游新石器時代工具的研究」『中国東北地区和新石器時代考古論
集』157~183

中間研志1985「紡錘車の研究—我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開」
『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集 石崎曲り田遺跡Ⅲ』105~160

西川宏1985「織物採用の歴史的意義」『論集日本原史』535~562

福建省文物管理委員会1965「福建東張新石器時代遺址発掘報告」『考古』1965-2,
49~61

福建省博物館1976「閩侯曇石山新石器時代遺址第六次発掘簡報」『考古学報』1976-1,
83~120

福建省博物館1983「閩侯曇石山遺址発掘新収獲」『考古』1983-12, (1076~1084)

福建省博物館1984 a 「閩侯溪頭遺址第二次発掘報告」『考古学報』1984-4, 459~501

福建省博物館1984 b 「福建黄土崙遺址発掘簡報」『文物』1984-4, 23~37

福建省博物館1991「福建平潭殼丘頭遺址発掘簡報」『考古』1991-7, (587~599)

福建省博物館1998「福建閩侯莊辺山遺址発掘報告」『考古学報』1998-2, 171~227

八幡一郎1931「弥生式土器の布目」『人類学雑誌』46-9

(『八幡一郎著作集』第3巻1979年雄山閣 p106に収録)

八幡一郎1968「朝鮮半島の古代紡錘車資料」『朝鮮学報』49

(『八幡一郎著作集』第3巻1979年雄山閣 p143～161に収録)

八幡一郎1969「イラン国アルボルス山中の古墓出土の紡錘車について」『上智史学』14

(『八幡一郎著作集』第3巻1979年雄山閣 p188～207に収録)

楊式挺, 陳志傑1981「談談佛山河宕遺址的重要發現」『文物集刊』3, 234～243

劉德銀1991「論江漢地区新石器時代出土的陶紡輪」『湖北省考古学会論文選集』(2),

36～43